

平成21年11月30日

## 2-2 独学独歩の卒業生教官

佐藤 保胤 附属中卒在職大7、昭3高師教授

佐藤保胤は、附属中第9回の卒業生です。このころの附属中の教官は、そのほとんどが大学出身者ですが、佐藤は大学をでておらず、独学で英語を身につけていったと言われています。このことについて、同僚でもあった地理教官の山本幸雄は次のように後に語っています。「佐藤先生は大学を出ていなかったんです。高等学校だけで身体の都合でやめられた方です。それなのにあれだけの力を修得され、あんな立派な英語教育をやっておられたんですからね。」と。

その佐藤の経歴は、明治33年に附属中学を卒業し、第二高等学校に入学しますが、病気のため中途退学し、正則英語学校で英語を学び、その後千葉県の安房中学で教員生活を送った後、附属中学校の教官となったようです。教官となった佐藤は、当時附属中で最も怖い先生で、イギリス風の紳士という感じでしたが、あたって答えられないで立っている、しばらくしてからただ一言「よござんす」とやられたようです。仇名は「セキユ」で、「セキユアー」という発音に特徴があったところから出たものですが、頭が石油カンミたいに四角だからだと思っていた生徒もいるようです。その後昭和2(3か?)年4月8日に高師教授になり

ますが、翌日の4月9日に退官しており、退官後数年高師講師を勤めています。なぜ、たった一日で教授を辞めたのかについてはよく分かりません。昭和19年、61歳で亡くなりました。佐藤保胤については、ほとんどを伊村元道論文「東京高等師範学校附属中学校英語科史稿」(東京教育大学附属中学校研究紀要22・23合併号 1973)にのりました。

## 2-3 新教授法の実践

寺西 武夫 神奈川県出身 東高師大9卒 在職大10、昭4 東京学芸大学教授

大正時代の後半から昭和のはじめにかけて、附属中学の英語の教授法は大きく変化していました。それは、

後の号で述べる岡倉由三郎の提唱やパーマーの来日によるものでした。そのような大きな変化の中で、教官となったのは、寺西武夫です。寺西は、東高師を卒業するとすぐに母校の横浜一中の教師となりましたが、一年後、附属中の教官に迎えられる

した。彼が受け持ったのは、一年生二クラスを6時間ずつ12時間・4年二クラスを2時間ずつ4時間、そして、附属小学校一部5年生を2時間の、計18時間でした。そして、研究日も一日あり、授業のある日も時間までに行き、その日の授業が終われば、大抵の先生は帰ってしまふ、というような日常でした。また、そのころの教官と生徒の間柄は他の学校と異なり窮屈でなく、若い先生が多かったせいもあり、昼の休み時間にはきままつて生徒たちと野球をしていました。

ところで、寺西が英語の教師となったころの全国の英語の授業の様子は、彼の随筆につきのように述べられています。

「今日とは違つて英語を聞いたり話したりする機会を持ちそうな日本人は極く限られた範囲の人々に過ぎなかつた。従つて英語教育の目標は自然読書力の養成という一点に絞られ勝ちであつたし、中学校では救学校への入学試験と関連して自然読書教授が教室での主要な、そして時には唯一の作業になりがちであつた。そのような情勢下にあつては、当時私達が附属中学でやっていた所謂新教授法ですら既に十二分に革新的であり、尖端的であり、現実には即しない理想的に過ぎる教授法であると思われていたのである。従つて東京高師の新卒業生達は皆同じような革新的意欲に胸をぐくませて赴任し、始めは大に努力するのであるが、周囲の「無理解」という厚い壁になつたと、孤軍奮闘の形となり、やがて重光さんではないけれども「刀折れ矢つき」遂に安易な訳読教授の陣営に降伏せざるを得なくなるといふのが実情であつた。」(寺西武夫著『英語教師の手記』吾妻書房 1963)

このような状況の中で教師となつた寺西は、附属中の教官として、「新教授法」の普及のため、来日した。パーマーとともに英語学習の研究や

新しくつくられた語学教育研究所のために尽力しました。寺西武夫著『英語の手紙の書き方 附 日記のつけ方』研究社 昭和32

## 2-4 不明

正木 辣 広島県出身 東高師大11卒 在職大11、大13

正木辣については、詳細がよく分かりません。ただ、大正11年・12年の『東京高等師範学校 附属中学校一覽』には、一学年担任・二学年担任として名前が記されています。また、当時の卒業生の思い出として、二学年終了後、正木が病気になる、退職したことが記されています。

## 2-5 名著『茶の本』の翻訳

村岡 博 山口県出身 東高師大9卒 在職大12、昭15 東高師教授

『茶の本』は、明治のときに岡倉天心によつて著された日本文明論とも言うべき著ですが、この著の岩波文庫の訳者が村岡博です。村岡は、これ以外にも岡倉の『東邦の理想』『日本の目覚め』(いずれも岩波文庫)の翻訳もしています。これらの著書がなぜ、村岡の手で訳されたのかについては、『茶の本』に記された、天心の弟である岡倉由三郎のほしがきに書かれています。それによれば、当時洋々塾(岡倉由三郎が主宰し、五六人作つていた同人会)で勉強をしていた村岡が、塾の雑誌『亡羊』に10回にわたつて翻訳掲載したものを、広く世に知らしめるために岩波文庫に入れたようです。この文庫は現在も引き継がれ、第100刷近くまで増刷されている名著です。この著の解説は、福原麟太郎が記していますが、その中に、わずかですが村岡のことや洋々塾の解説もあり、本の由来や村岡のことを知ることができます。



村岡博訳 岡倉 覚三著『茶の本』 岩波文庫



寺西武夫の著書 1963年発行